

## 荒れる山林 復活

木材価格の低迷や過疎化などを背景に、林業の担い手の減少傾向は、ますます放置された森林の管理が問題になっています。防災や水源確保、どの森林が持つ機能を維持し、林業を盛り上げるにはどうすればいい

に木材価格は下落します。為替レートの円高基調になり外材が安くなったのと、国内の木材需要も頭打ちから減少カーブを描き始めた

林業の従事者は減少傾向が続く、山林が荒廃しています。対応策として、政府は森林を意欲と能力のある林業経営者に集約し、大規模化を進める「森林バンク」を創設する方針です。林業の規模拡大を通して、収益性を高めようとする産業政策です。

しかし、大規模化を促す政策によって、地域に住み続ける小規模な林業経営者が軽視されるのではないかと懸念しています。

日本の林業政策は、これまで規模拡大を目指してきました。

森林の所有者から土地を借りて、林業公社などがスギやヒノキを植え、木を販売した収益を分け合う「分取造林事業」。金融機関などから借入れを行い、数十年かけて収益を得る事業モデルでし



1961年生まれ。大分県さこの研究指導センター研究員などを経て、2007年から現職。共著に「林業新時代」。

九州大学大学院教授

佐藤 宣子さん



山に現金が戻ってきた。失われた切った後で造林する意欲が失われてしまった。50年から70年にかけて年間30万円以上植林していたのに、今は2万円程度しか植えなかりました。これでは、資源的

た。しかし、木材価格の低迷によって、多くの公社が多額の負債を抱え、経営破綻しました。

むしろ時代の変化に柔軟に対応してきたのは、小規模な事業者たちだと思えます。様々な林業の現場を訪ねていますが、森林の所有者、製材所、工務店、建築士が連携し、施主を山に招いて伐採の現場を見てもらう「直住宅宅」の仕組みを作りあげると、新しい需要を掘り起こしています。

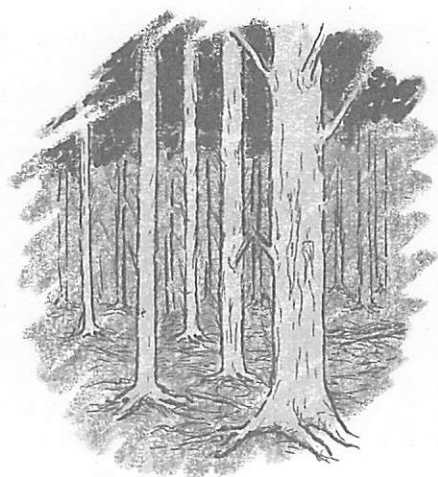
こうした動きの中で注目されているのが「自伐型林業」です。山を所有する人や借りた人が、森林の管理、間伐などの施業、販売までのすべての工程を自分たちで行う小規模な林業です。必要な分を少しずつ切っていくため、運搬用の作業道も小規模。山への負担が少ない環境保全型の林業です。

総務省の調べでは、一部の過疎地域では、都市部からの移住者が増えています。「田園回帰」の流れの中で、「自伐型林業」に共鳴し、地方に移住した若者たちが林業に取り組んでいます。現場で話

すと、東日本大震災の経験をきっかけに、木材でのエネルギー自給をしたいと考え、移住してきた若者が多いですね。

また、「半林半文」といって、林業と他の仕事を組み合わせながら、生計を立てる人が多い。農業と違い、林業は作業が1週間延ばしても木の品質や価格に大きな影響はありません。夏はカヌーのインストラクターをして冬に林業を営む人もいます。お寺の住職と兼業している人もいました。

福井県のある山村では、おはあちゃん(おはあ)が移住してきた若者に「インシ」に食べられてしまつ前に山のタケノコを取ってきてと頼み、その若者が届けるといふ信頼関係が築かれていました。そこでは林業が高齢者を見守る福祉の側面もあると感じました。若者は仕事や地域の人々とのふれあいを通じ、生きる充実感を得ています。



14.6万人

林業従事者数の推移

総務省「国勢調査」から

12.6

## 小規模な担い手暮らしの柱

昨年の九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市や東峰村に調査に入

って痛感したのは、日頃から山に入って点検することの大切さです。雨が降った後、水の流れはどうなるのか。「減災」を目指すにはどんな管理が望ましいのか。山の周辺に住んでいる小規模な担い手は、こうした自然の変化に向き合ひやすく、地域防災の担い手としての側面もあきまっています。適切な森林の管理は、温室効果ガスの削減や水源維持にもつながります。

このように林業は、地域の福祉、防災、環境と密接にかかわっています。大規模化や効率化を目指す産業政策を推進するだけでは、見落としてしまつかもしれない側面があるのです。

環境に自配りする大規模な担い手もいますが、現在の政策は大規模化に偏り過ぎていると思えます。国や自治体が小規模な担い手の意欲や暮らしを支える政策をもっと打ち出せば、若者を中心に林業の裾野が広がる可能性は十分あると思えます。それは地域を豊かにする有力な手段の一つでもあります。

(聞き手・古藤聡)